

南小四郎の日本軍後備歩兵第 19 大隊と東学農民軍殲滅

信長正義

はじめに

2015 年は「戦後 70 年」という節目で、日本人の「歴史認識」が強く問われた。その原因の一つは学校教育で、日本の近現代史をしっかりと教えられてこなかったからだと言われている。それは憲法改正を党是としてきた自民党が長期に政権を握ってきたことで、日本が行ってきた戦争と侵略の歴史を反省するどころか国民に知られたくないことにあったからだと思われる。明治以降の日本の最初の侵略行為は 1894 年の台湾と日清戦争である。ある教科書は「日清戦争」について次のように書いている。「開国後の朝鮮では、日本との貿易がはじまると物価が上昇した。しかし政府は適切な政策をおこなえず、民衆は生活に苦しみ、不満を強めた。1894 (明治 27) 年に農民が反乱をおこすと、東学を信じる指導者のもとで大反乱へと発展した〈甲午農民戦争〉〔欄外の註には「日本人などの外国人の排斥や、朝鮮政府の打倒をめざした」とある〕。朝鮮政府が清に援軍を求めると、日本も軍隊をおくった。農民たちは政府と和解したが、日本軍はしりぞかず、朝鮮の改革案を清に提案した。清がそれを拒否すると、日本は清と戦争をはじめた。この日清戦争は、日本と清との戦争であったが、争ったのは朝鮮半島の支配権であった」【新中学校『歴史』清水書院】。すなわち教科書には、日本が戦争の口実をつくるために朝鮮王宮 (景福宮) を占領したこと、それに異議を唱えた東学農民軍が抗日闘争を明言して第二次蜂起をおこなったこと、日本政府は表題のような東学農民軍の殲滅をおこない、3 万人とも 5 万人ともいわれる農民を殺戮したことなど一切書かれていない。

ここでは、東学農民軍を全滅させた日本軍後備歩兵第 19 大隊を率いた南小四郎の文書、および中塚明氏、井上勝生氏の著書を参考にしながら、『生命の目で見ると東学』(朴孟洙著) から「日本軍後備歩兵第 19 大隊長 南小四郎と東学文書」を翻訳し、その内容を紹介しつつ東学農民軍殲滅について学びたいと思う。

[] は信長の注。

1. 「山口県文書館」訪問



昨年 11 月中旬に山口県文書館を訪ねた。井上勝生氏や朴孟洙氏の著書からその存在を知っていたからである。文書館は「山口県立図書館」内の二階部分に位置している。図書館は新幹線新山口駅から山口線に乗りかえ山口駅で降り、タクシーでワンメーターのところにある。

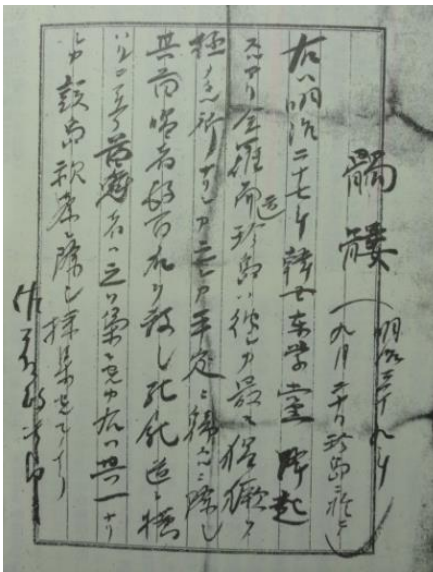
山口県の「諸家文書目録」の中から「南家家門」を選び、南小四郎に関するものを見せてもらった。資料を見せてもらったが、貴重な資料だということでコピーはできないがカメラ撮影は OK だった。

これらの文書は、1894 年 11 月初 (陰暦 10 月)、東学農民軍鎮圧を担当するために朝鮮に派兵された日本軍後備歩兵第 19 大隊の大隊長南小四郎 (1842~1921) が収集した文書を、小四郎の孫である南三郎氏が文書館に寄贈したもので、2010 年 3 月から一般公開されるようになった。すなわちごく最近のことである。ところが、この南家家門所蔵の東学文書が文書館に寄贈され、一般公開されるまでには 15 年間を要したという。南家の東学文書の所在が確認されてから一般公開されるまでの苦労話を朴孟洙氏の文章から見てみたい。

2. 文書発見と公開の経緯



朴孟洙氏は1997年4月から2001年3月までの4年間、北大大学院文学研究科で日本軍隊史を専攻されたが、その時の指導教授が井上勝生氏であった。この二人の出会いは、1995年7月に北大文学部傘下の古河講堂人類学教室の旧標本室で、長い間放置されたままで発見された全羅南道珍島出身の東学農民軍指導者の遺骨（頭蓋骨）問題にかかわることになってからである。その真相を明らかにするため日韓両国の共同調査に参加し、その後ずっと学問的交流を続けている間柄である。



左の紙片は、北大に送られた頭蓋骨の中に入っていた「髑髏」[どくろ]と書かれた添付文書である。そこには、1894年に起こった東学農民軍の蜂起に対し、全羅南道珍

島において彼らを平定し、主唱者数百名を殺しさらし首にした。そしてこの髑髏は1906年に珍島を視察した時に採集した一つであると署名入りで書かれている。こ遺骨放置事件が大問題となり二人の東学に関する資料の発掘が行われていった。

文書発見の経緯について朴孟洙氏は次のように書いている。研究者の壮絶な史料集めとその努力に敬意を表す意味で長文であるが紹介したい。

【東学農民軍指導者の「遺骨」問題と関連した日韓共同調査が始まったばかりの1997年夏に、筆者は井上勝生教授とともに東京にある外務省傘下の外交史料館をはじめとして、防衛省傘下の防衛研究所図書館、国会図書館憲政資料室、国文学資料館等を次々と訪問して、日本に残っている東学農民革命関連資料の調査および収集に着手した。それから現在まで日本各地の図書館、公文書館、資料館等に所蔵されている東学農民革命関連資料の調査と収集に臨んでいる。

この中でも特に防衛研究所図書館を初めて訪問した1997年7月に、筆者は農民軍鎮圧に直接参加

した日本軍後備歩兵第19大隊の大隊長や将校についての調査が東学農民革命研究にはとても重要なことだと井上教授に繰り返し説いた。井上教授も筆者の意見に全面的に共感し、資料調査に積極的に協力することを約束してくれた。こうして同年の冬に二人は防衛研究所図書館に何度も訪問して資料の調査に臨んだ。

このとき二人はこの図書館に所蔵されていた「陸軍予備後備将校同相当官服役定年名簿」(明治27年7月1日調)を発見し、その名簿の中から農民軍鎮圧を担当した部隊、すなわち『東学党討伐隊』という名前で朝鮮に派兵された日本軍後備歩兵第19大隊の大隊長南小四郎少佐、配下の中隊長と小隊長の軍経歴に関する基本情報を入手することができた。そこで二人は、南小四郎の軍経歴を土台にして、彼の出身地である山口県を中心として後裔が生存しているかどうか等を広範囲に探索する作業に着手した。

ほどなく南小四郎の孫が山口市に住んでいることが分かった。それが1999年3月ごろだった。後裔の方に会って南小四郎の行跡について知りたい気持ちが強かった。しかし加害者である南小四郎の後裔を、被害者である農民の後裔のような筆者が会うことはいろいろと問題が起こるかもしれないことを考えて、南の後裔に会うことと、もしかしてその後裔が保存しているかもしれない資料を探し出すことを井上教授が担当することにした。こうして2001年3月ごろになって孫である南三郎氏が住んでいる山口市の住所と電話番号を知った。しかし残念ながら筆者は4年間の留学生生活を終えて2001年4月に帰国することになり、南家家門の東学文書を探することは全面的に井上教授にお任せすることにした。

元来、日本近代の明治維新史が専攻だった井上教授は1995年7月に北大で発見された農民軍指導者の「遺骨」問題から、日本政府および日本軍が東学農民軍鎮圧過程で、具体的にどのような役割をしたのかを究明するために東学農民革命の研究に方向を転換したのである。そしてその後は全力を傾けてその成果を次々と発表した。また多くの史料を発掘されたが、東学農民革命関連の1次史料のなかでもっとも代表的な成果は、農民軍鎮圧担当部隊であった後備歩兵第19大隊および大隊長南小四郎に関する史料だということができる。

このような第 19 大隊とその兵士の動向に関する第一次史料を発掘する過程で画期的な転機が訪れた。それは 1999 年以来これらの行跡を追跡しながら南家後裔との接触を試みていた井上教授に 2008 年 3 月ごろ、孫である南三郎氏から「会ってもよい」という連絡があった。定年退職をまじかに控えていた井上教授であったが、山口市に駆けつけて彼に会い、南小四郎が東学農民軍鎮圧当時、朝鮮の現地で使用していた軍用の柳行李の中に多数の東学農民革命関連史料を保管しているのを確認した。

しかしこれらの史料をきちんと保存しただけでも自由に閲覧できるように公開することが新しい課題として浮上した。なぜなら、東学文書を所蔵している南小四郎の後裔の積極的な助けなくしては史料の公開が不可能だったからである。このために井上教授は何度も南三郎氏を説得した。その結果、南三郎氏は 2008 年 6 月ごろに自分が保管していた東学文書を、山口県立文書館に委託して保管することに決めた。委託保管に臨んで井上教授と千葉大学の趙景達教授が同文書館を訪問して文書の整理作業に加わった。そして 2010 年 3 月、ついに文書館側と南三郎氏との間に文書寄贈に関する協約が正式に締結され、この協約締結を契機に南家家門の所蔵である東学文書の全面的な一覽および公開が可能になった】。

3. 南小四郎の経歴書

明治 28 (1895) 年 8 月に記した「経歴書」の表紙をみると、開城兵站司令官陸軍歩兵少佐南小四郎とあり、その左側に朱色で、大日本帝国陸軍歩兵少佐南小四郎とある。また、中央に経歴書と書かれた文字の左側には、朱色で東学党征討経歴書とある〔写真上〕。その経歴書の一部〔写真下〕を現代文に直して紹介すると

- 明治 27 (1894) 年 9 月 5 日に召集令状を受け、後備歩兵独立第 19 大隊長を任命された。
- 同年 10 月 28 日、渡韓の命令を受ける。
- 同年 11 月 7 日、仁川に上陸し仁川兵站監部へ出頭。陸軍少将福原豊功の指揮下に属し、陸軍歩兵中佐伊藤祐義より東学党征討隊指揮官の命を受け、右に関する命令および訓令を受ける。
- 同 11 日、京城駐在の井上公使より東学党討滅に関する特別訓令を受ける。三路に分進する各中隊

長、鉄道線路測量護衛の支隊長千石貢等に命令および訓令を布告する。

○同 12 日、竜山出発、中路清州街道を前進し、新院竜仁を経て同 14 日陽智県着、先発の教導中隊と後備歩兵独立第 18 大隊の若干名および巡查若干名を本隊に合す。

○同 22 日、偵察斥候を報恩県方面に一等軍曹岸田義一郎の燕岐方面に出す。

○同 23 日、前 12 時清州出発、文義県を経て至明楼に至り賊徒に遭遇し、戦闘数次にわたり沃川方向に撃退し、直ちに支隊を出しこれを追撃する。同日仁川伊藤司令官および京城公使館へ戦況を報告する。

○同 25 日、伊藤司令官より、東路にある東学党討伐隊に京城守備隊の 1 中隊を増加したとの電報を受ける。西路分進中隊長大尉森尾雅一より公州城の危急を報告し、再三来援を求め〔牛金峙の戦い〕。

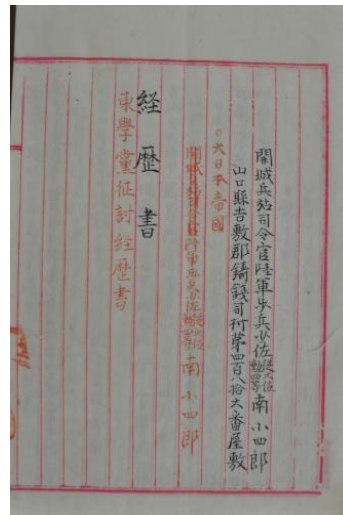
○同 26 日、宮本支隊は周安付近において賊徒に遭遇し、戦闘はげしく努めるが賊徒数万、弾薬欠乏のため一時文義県に引き揚げその危急を報告する。

○12 月 10 日、魯城県に向かって前進すると、賊徒が四方の山上に現れて襲来。応戦数時にわたりこれを撃退する。森尾大尉へ本隊の戦闘および賊徒の包囲に関する命令を下す。

○同 11 日、(旧 11 月 9 日) 森尾大尉より賊徒は退走して論山付近に集合しているとの報告を受ける。

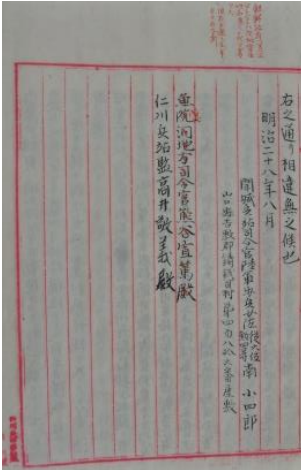
○同 30 日、(旧 12 月 2 日) 赤松支隊より全奉準〔正しくは全奉準〕捕縛の報告を受ける。

○同 31 日、南原を出発して淳昌県に到着し、巨魁全奉準を受取り、負傷の治療をした。



○1895年1月5日、羅州城に着く。各地より賊徒が跋扈して人民を殺害するのみならず、その中でも長興使を銃殺する旨の報道があり、よってこれが討滅に関する部署となった。

○同6日、咸平にある鈴木特務支隊より賊情および留陣に関する報告を受け、同支隊へ海岸にある賊徒の殲滅に着手すべき命令を下す



○1月19日、筑波艦長へ沿岸、珍島、濟州島等の賊徒殲滅方の命令を下す。

○同日、石黒支隊へ沿岸各地の搜索、賊徒捕縛の命令を下す。

○同21日、統衛營兵大隊長へ捕虜は必ず羅州本部へ送付すべきと命令を下す。

○同22日松木支隊へ珍島付近の残賊を速やかに殲滅すべきと命令を下す。

○2月15日、石黒大尉へ大屯山〔正しくは大菟山〕の賊徒を殲滅すべきと命令を下す。

○21日、石黒大尉より大屯山の賊徒を殲滅したとの報告を受ける。

〔上の写真は、22頁に及ぶ経歴書の最後頁で明治28年8月に、魚院洞地方司令官熊谷宣篤と仁川兵站監高井敬義あてに書いたことを記している〕

4. 日本史から隠された東学の歴史

1894年1月に、虐政の改革を求めて全羅北道の古阜で全琫準を中心として農民蜂起があった。しかしこれは農民軍が弾圧され失敗に終わった。そこで改めて東学教徒を中心とした農民軍を形成した全琫準たちは4月に反封建、反外勢を掲げて全州城を目指した。二度にわたる官軍との戦いに勝利した農民軍は5月末に全州城を占領した。驚いた朝廷は清国に派兵を要請したが、それを察知した日本も軍隊を送った。農民軍も官軍も外国軍特に日本軍が出動したことで双方がすばやく和解し〔全州和約〕、農民軍は城を明け渡す代わりに弊政の改革を要求し全州城を撤退して解散した。これが第一次東学農民革命である。

農民軍の解散によって日清両軍が朝鮮の地に居座る理由がなくなったにも関わらず、日本は何らかの理由を作って日清戦争をもくろんでいた。そ

こで事件を起こしたのが7月23日の日本軍による朝鮮王宮〔景福宮〕占領事件である。この事件によって国王を捕虜としたことで、清国との対決の契機となったばかりでなく、全琫準はこの占領事件によって国権が奪われ、国家の危機だと認識した。そして8月1日に日清戦争が勃発し、朝鮮の地で行われる戦争、日本が勝利すれば明らかに朝鮮侵略が行われると見た東学農民軍は10月に再蜂起し、抗日闘争であることを宣言した。「日本史」ではこの事件はなかったかのようにしたまま今日まで来ている〔『歴史の偽造をただす』参照〕。これが第二次東学農民革命といわれる戦争である。「はじめに」で清水書院の日清戦争についての内容を教科書を紹介したが、以上述べたようなことは一切書かれていないばかりか、日清戦争の原因が農民の反乱にあったように書かれている。しかし事実はそうではなく、日本による朝鮮支配への欲望が最大の原因であったのである。

烏合の衆の農民軍と軍隊である日本軍とでは勝負にならなかった。勝敗の分岐点となった公州牛金峙の戦い〔経歴書の11月25日〕での惨状を全琫準は陳述で「二回の対戦後（公州戦は二度あった）、一万余名の軍兵を点呼すると、残ったものはわずか三千名であり、その後ふたたび対戦後に点呼すると五百余名に過ぎなかった」と述べている〔『東学農民革命100年』つづて書房発行〕。これは日本軍の中の東学農民軍を殲滅させるよう命じられた鎮圧部隊と戦ったからである。

日清戦争勃発後、東学農民軍が再蜂起したことを知った日本軍司令部の川上操六参謀本部次長〔参謀総長は有栖川宮（1835～95）という皇族で1889年から病没まで務め、東学農民軍鎮圧作戦と日清戦争を指揮した〕は「東学党に対する処置は厳烈なるを要す、向後悉く殺戮すべし」という電報を朝鮮兵站線の日本軍司令部に送った。これが1894年10月27日で、南小四郎が渡韓の命令を受けたのがその翌日であったことが「経歴書」から見るができる。また仁川司令部には、東学農民軍討伐を専任する3中隊の部隊（後備第19大隊）を朝鮮に派遣するという電報も届いている。

『植民地朝鮮と愛媛の人びと』（日本コリア協会・愛媛編著、愛媛新聞社発行）の中で申栄祐氏は「1894年日本軍後備歩兵第19大隊中路軍の鎮圧策と東学農民軍の対応」と題して次のように書い

ている。東学農民軍が日本軍を駆逐する目的で再蜂起すると、日本軍は四国の後備歩兵第19大隊で山口県に駐屯していた守備兵を増派しこれを鎮圧しようとした。…そして東学農民軍剿滅を目標に虐殺をほしいまににした。〔同書のなかに、尾上守氏の「海南新聞にみる東学農民戦争—後備歩兵第19大隊の出征・帰郷」がある〕。

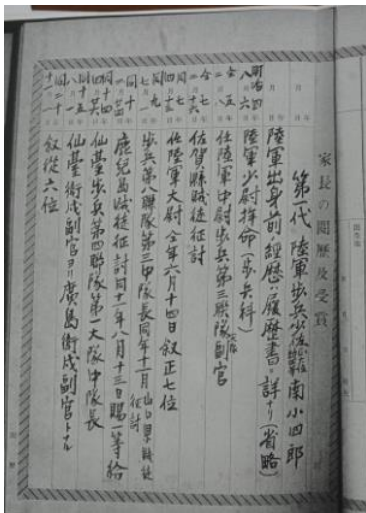
後備第19大隊は、3つの中隊で、全員で6百何十人かの部隊である。大中隊が朝鮮の東方面を鎮圧しながら進軍し、中央部を第1中隊が討伐しながら南下する。大隊長南少佐の本部隊もこの第3中隊とともに進軍した。さらに西海岸方面を第2中隊が南下していく。こうして東学農民軍は朝鮮の南西部に追い詰められ、特に珍島において凄惨な殲滅作戦に遭った〔南小四郎日記の1月22日〕。

5. 日本政府の責任

南小四郎の「履歴書」をみると〔写真下〕

○明治4年（1871年）陸軍少尉拝命

○同5年、陸軍中尉歩兵第三連隊大隊副官



○同7年、佐賀県賊徒征討、陸軍大尉

○同9年、歩兵第8連隊第3中隊長、山口県賊徒征討

○同10年、鹿児島県賊徒征討

○仙台歩兵第4連隊第一大隊中隊長

○広島衛戍副官となる

この履歴書の中の「賊徒征討」とは、明治新政府になって不満を持った士族たちの暴動に対する取り締まりである。明治7年（1874年）2月に江藤新平をかしらにした佐賀の士族が暴動をおこしたが〔佐賀の乱〕、当時実権を握っていた大久保利通はこれを平らげるよう命令をくだし、陸軍中尉だった南小四郎が働いたことを意味する。これによって彼が朝鮮の賊徒＝農民軍を殲滅するために選ばれた理由がわかる。日清戦争を遂行するなかで、通信線の切断等を含めこれからの朝鮮支配にとって、最も抵抗の強い根を徹底的につぶしておく必要があったからである。そのために、前述したよ

うに第19大隊指揮下に3個中隊を加えた農民軍鎮圧隊を派遣している。これは総理大臣伊藤博文と参謀総長の有栖川宮等の日本政府および軍部最高指導者の指示があったわけで、これらが直接に農民軍鎮圧に関与したことがわかる。しかし、参謀本部が編纂し、今日もなお日清戦争の正しい歴史だとされている『明治二十七八年日清戦史』の中に日本軍の東学農民軍討伐作戦はまったく記述されていない。この点について井上勝生教授は次のように言っている。【こうした日本人にとって「負」の遺産であっても、またこのような農民軍殲滅行為は朝鮮の司法権を侵害した行為であり、当時の国際法に違反した不法行為であったことを日本人は知るべきであろう。】

6. 南家東学文書の内容と特徴

朴孟洙円光大学教授は次のように書いている。

【この南家の東学文書の内容にはどのような特徴があるのか、簡単に言えば

第一、南小四郎と駐韓日本公使館井上馨が明治維新当時からとても「親密な」間柄であったことが明らかになった。東学農民革命当時南小四郎が指揮する日本軍後備歩兵第19大隊は駐韓公使大本営および朝鮮現地の駐韓日本公使館の井上馨の指示を受けて行動していた。井上馨が南小四郎の直属の上官だったからである。二人は明治維新前後に明治新政府の常備軍で行動をとともにした間柄であった。この親密な関係だったことで明治維新前後の日本における民衆の反乱を鎮圧した経験が豊かな南を、「意図的に」農民軍鎮圧担当部隊の指揮官に推薦した可能性を示唆して注目される。

第二、この征討「経歴書」には、南小四郎が指揮する後備歩兵第19大隊が駐韓日本公使館の指示を受けたのはもちろんだが、日本政府〈外務省〉と軍部〈大本営〉の指示を受けて農民軍鎮圧に臨む状況が詳細に記録されている。これは東学農民革命研究者が、農民軍鎮圧を担当した第一線部隊である第1大隊と南小四郎の行跡だけに注目してきた視角に根本的な問題点があったことを示唆している。すなわち、従来の研究では農民軍鎮圧過程で日本政府や軍部が具体的にどんな役割をしたのかなどはほとんど注目しなかったのであるが、この「経歴書」は農民軍鎮圧作戦が朝鮮に出兵した現地部隊（後備歩兵部隊19大隊）単独の作戦で

はなく、日本政府と軍部の直接的な指示によって行われたことを示している。

第三、後備歩兵第 19 大隊の役割が農民軍鎮圧だけにあったのではなく、農民軍を支援したりあるいは支援していた前・現職の地方官吏をはじめとして、農民軍側に同調して食糧等を提供したり、その他便宜を図っていた広範囲な同調勢力に対する査察および情報収集、逮捕拘禁等また違った任務を行っていたという事実がこの度の発掘された東学文書で確認された。

以上のことは東学農民革命当時、東学農民軍が掲げていた「除暴救民」や「斥倭洋」の旗幟に共感する勢力が身分の上下に関係なく、また東学教徒の可否にかかわらず、朝鮮社会に広範囲に存在していたことを雄弁に語っている】。

7. その他の史料

山口県文書館で南小四郎に関する史料を見ると参考史料として、井上勝生『甲午農民戦争と鎮圧農民軍に関する基礎的研究』を紹介していた。そこで担当の方にこの参考史料を見せてほしいと頼むと「甲午農民軍包囲殺戮の広島本営命令について - 1894 年、日朝間の電文史料を中心にして」という井上勝生氏の論文と、『南部兵站監部日誌』を見せていただいた。後者は言うまでもなく 1894 年 10 月 27 日に川上兵站総監より、東学党をことごとく殺戮せよという電報を受け取った仁川の南部兵站監部の日誌である。これを基として前者の論文が書かれたのであるが、そこに「はじめに」と題して次のように書かれている、

【1894 年 7 月に始まった日清戦争で、日本軍は朝鮮と中国領土へ侵攻するために、ソウル朝鮮王朝を、近年「日韓戦争」と呼ばれる戦争によって軍事占領し、鴨緑江を越えて中国軍と戦うために、朝鮮半島を日本軍の兵站線とした。日本の大本営は「朝鮮を中国から独立させるために」中国と戦う、と大義を掲げたのだが、実際には、朝鮮内に侵入した日本軍に対して、朝鮮の農民軍がほぼ朝鮮半島全土で蜂起した。もし日清戦争のなかで「朝鮮を助けるため」という大義が掲げられた朝鮮の地で、膨大な数の朝鮮民衆の処刑者、犠牲者が日本軍の作戦によって発生していたことが知られていたならば、その後の近代史も、なにほどかは変わっていたかもしれない】。

8. 今後の課題

最後に、朴孟洙氏の文を紹介したい。

【東学農民革命に関する研究で、最近注目されるのは東学農民軍犠牲者数に関するものである。この分野の研究を主導している研究者としては、井上勝生教授と趙景達教授、韓国の姜孝叔先生と申栄祐教授である。これらの研究を総合すれば、東学農民革命当時、日本軍によって犠牲となった農民軍の数は、最少で 3～5 万名に至っていて、この数字は日清戦争当時清国側の犠牲者 2～3 万、日本側犠牲者数千名の何倍かに達するものである。要するに「日清戦争」最大の被害者はまさに朝鮮民衆だったのである。

しかし、日清戦争の過程で日本軍によって犠牲となった朝鮮民衆の数字が最少 3～5 万名に至ったという事実は、現在の日本社会にほとんど知られていない。むしろ今日の日本社会内では、日清戦争こそ東の辺境にある小さな国・日本を世界の有数な強大国に入ようになった「文明の戦争」だったという歪曲した宣伝が一つの常識になっている。この度発見された南家東学文書はまさにこのような現代日本の誤った常識を根本的に正すことのできる歴史的事実を含んでいる。その歴史的事実というのは、日清戦争こそ朝鮮という国の新しい地平を開くために「下からの革命」〔東学農民革命〕を企てた朝鮮民衆に対する大々的な虐殺を行った「野蛮な戦争」であったということ、したがって現代の日本はまさにそのような「野蛮な戦争」という歴史的負債を清算しない限り、過去からただ一歩も自由にならないということを直視しなければならないということである。

この度の南家所蔵の東学文書の全般的な内容が韓国社会に広く紹介されることを契機に、韓国と日本国内で農民軍虐殺問題をはじめとする東学農民革命、さらに日清戦争全般にかけて既存の研究の問題点について徹底した省察とともに、南家所蔵東学文書のような第一次資料を土台とした「歴史的事実究明」作業が一層活性化することを期待する】。

最近、日本の「歴史認識」が問われるとき、「従軍慰安婦問題」だけでなく、このような歴史があったことを謙虚に受けとめ、将来のよりよい関係を築くための努力が必要である。